

起信論における熏習について

一色 順心

大乘仏教がその存在全体をかけて明らかにせんとした「大乘」という課題を、特に如来蔵思想の立場から解明した論著に『大乘起信論』がある。熏習説は、『起信論』において「染淨相資」と位置づけられ、染淨二法の相互熏習が詳細かつ組織的に祖述されている。周知の如く、熏習は衣服に香が乗り移る譬喩で知られるように、ものの習慣的な同化作用をいう。甚だ具象的とも思われる概念が『起信論』に取り上げられ、他の熏習説とは異なつた独自の展開をみせている。北村教蔵氏「起信論の熏習説」、平川彰博士著『大乘起信論』等にこれが論究せられ、『起信論』の熏習を概観することができるのである。『起信論』の熏習説は四種法熏習として重要な意義を有するが、特に、賢首大師法蔵が、阿梨耶識中の覺と不覺の互熏というように、阿梨耶識の問題に互つて熏習を論じていることが注目される。また法蔵が『起信論』の縁起説を如来蔵縁起としているように、生滅心の根柢としての真如如来蔵が問題であり、これを熏習説の観点から考察したいと思うのである。

まず、熏習の体となる四種の法とは真如、無明、妄心、妄境界の四法をいい、『起信論』に、

復次有四種法熏習義。故染法淨法起不_二斷絶_一。と説示されるように、染淨二法の不斷相統は、四法の相互の熏習に

依つて成り立つといえる。四種法のうち真如は淨法、余の三法は染法を意味し、これら染淨二法の關係は、

真如淨法実無_二於染_一、但以_二無明_一而熏習故則有_二染相_一。無明染法実無_二淨業_一、但以_二真如_一而熏習故則有_二淨用_一。

と略説されている。これは、無明より真如への熏習と真如より無明への熏習とを意味することから、真如であれ無明であれ、二法が相待關係にあることが基本となる。しかし「染相有り」、「淨用有り」の語に着眼するとき、二法は単なる並列關係ではない。無明が真如に熏習するといつても、真如のうえに「染の相」が表われているにすぎないのだから、無明染法は真如淨法に対するとき無体の法とならねばならない。

次に、『起信論』の染法熏習の箇処に、「無明染法の因有るを以つての故に即ち真如に熏習す」とあることから、真如の受熏が問題となる。『起信論』ではこれを認める立場にあるが、唯識の立場では、真如は無為法で、不生不滅、常住のものであり、変化しないものに名づけたのだから、受熏処（所熏）にはならないとする。これは、『成唯識論』卷二の所熏四義の第三可熏性として述べられており、この観点から真如受熏が批判される。唯識の立場では所熏は阿頼耶識、能熏は七転識に限られるから、真如を所熏とすることは許されない。所熏真如を『起信論』は如何に理解しているのか。これについては『楞伽阿跋多羅宝經』の熏習説が問題になつてくる。すなわち、

大慧、不思議熏及不思議变、是現識因。大慧、取三種種塵_二及無始妄想熏、是分別事識因_一。

とあつて、「不思議熏」の語が注目される。この文章を法蔵は、元曉

の『起信論疏』の説に基づいて『起信論義記』に、

解云、不思議熏者、謂無明能熏真如、不可熏處而能熏故、名「不思議熏」。又熏即不熏不熏之熏名「不思議熏」。

と解釈する。つまり法蔵は、不思議熏を真如受熏の根拠として理解している。本来、熏習を受けるべきでない処に敢えて熏習を許しているという、一見矛盾なあり方において所熏真如が成り立つているといわねばならない。また「不思議熏」の語が、『楞伽經』のみならず、『起信論』自身の中にも見い出せることから、真如受熏の解明への手がかりが「不思議熏」にあると考えるのである。

次に、能熏としての真如が明らかにならねばならない。『起信論』に述べる真如熏習は体相用三大よりの熏習であつて、中でも自体相熏習が能熏真如の内面的な構造を表現しているのではないかと思われる。『起信論』に、

自体相熏習者、從「無始世」來具「無漏法」、備有「不思議業」作「境界性」、依「此二義」恆常熏習。

と表わされるように、これは真如が衆生の内熏力として作用することと他ならない。衆生は本来、真如の内熏力を受けながらも、それを自覚できず、もしできたとしても精々不思議だという表現に落ち着いてしまう。しかし不思議な用きを不思議として捨てるのではなく、それに疑問を見い出して体得せんとする願いが生まれてきたとする。その時生まれた願い自体は、衆生本具の無漏法の用きということになる。またその用きは、衆生よりすれば始覚の歩みに立つことであり、本覚が現実的な境界の性として見い出されることを意味する。そこで「無漏法を具す」と「境界の性と作る」ことの二義に依つて真如自体相熏習が明らかにになる。このように、真如の内熏

説が人間の現実的な歩みに即して立てられているといえる。

以上、熏習について三点に整理して考察したが、その中で真如受熏が不思議熏に他ならないと指摘した。そもそも真如とは、人間の力動的で躍々とした生き方に名づけられているのだから、真如の熏習を不思議熏としか表現できなかつた意味も首肯できよう。真如が所熏とも能熏ともなりうるとする熏習説は、唯識の立場に比して熏習をかなり広義に捉えているといえる。しかし『起信論』における真如の意義を正しく把握する中で、『起信論』の熏習説が示されるとすれば、縁起の真相を語るものとなると思う。

1 宗粹雜誌第九卷第三号・第五号明治38年、所収。

2 大正蔵四四・二七〇・b「彼言「仏性力」者即此本覺内熏之力耳。良以「一識含「此二義」更互相熏遍生「染淨」故也。」

3 大正蔵四四・二四三・b

4 大正蔵三二・五七八・a

5 大正蔵三二・五七八・a

6 大正蔵三二・五七八・a

7 新導成唯識論卷二・二五頁（七五頁）「三可熏性、若法自在性

非「堅密」能受「習氣」、乃是所熏。此遮「心所及無為法依レ他堅密故非「所熏」」

8 大正蔵十六・四八三・a

9 大正蔵四四・二一六・a、b

10 大正蔵四四・二六九・b

11 大正蔵三二・五七九・b「如「是功德皆因「諸波羅蜜等無漏行

熏、及不思議熏之所「成就、具「足無重染相」故、説為「報身。」

12 大正蔵三二・五七八・b